青春の碑

第二部

近藤芳美著

青春の碑　第二部

1964年4月30日　第1刷発行

¥ 700

著　者　近　藤　芳　美

東京都港区麻布笄町 75 番地
発行者　天　野　　亮

東京都青梅市根ケ布385番地
印刷者　山　田　一　雄

発行所　垂　水　書　房　東京都港区麻布笄町75
振替東京69470番

印刷　精興社・製本　三水舎

目次

I

一　葦の芽……七
二　翁草……二三
三　鶴の影……三五
四　うすゆき草……五三
五　結氷期……六五
六　ななかまどの峡……七七
七　抜錨……九〇
八　はまごうの丘……一〇一
九　遡江……一一三
十　綿野……一二八
十一　こがらしの雁……一四三
十二　川霧……一五三
十三　李の花……一六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

十四　蝙蝠のむれ……一七七
十五　夏草……一九〇
十六　英霊船……二〇五
十七　岬の墓……二二〇
十八　夕潮……二三〇
十九　死者の隊列……二四三

II

一　水鳥の叫び……二五五
二　野の警報……二六九
三　天の火群……二八〇
四　焦土のはて……二九四
五　冬こがらし……三〇六
六　終章・死者たちの街……三一九

I

一　葦の芽

昭和十四年四月、長い朝鮮の結氷期が終るとともに、竜岩浦と云う、鴨緑江河口の町にはじまった新しい精錬所の建設工事現場にむかって、私はひとり京城駅を発った。すべてを断ち切る激しい生活を、再び求めるためであった。北行する大陸急行の片隅に、私は一年前、はじめての給料で買ったゲルハルト・ヒッシュの歌う「冬の旅」のレコードアルバムだけを抱いてうずくまった。灰色のくもりが、まだ春の遠い北朝鮮の原野をどこまでも覆っていた。

新義州に着いたのはその日の夕ぐれであった。目的地の竜岩浦に行くには、そこからさらにバスに乗って、鴨緑江の岸を二十粁ほど下流に下らなければならなかった。幾年か前から工事をはじめた鉄道が、まだ開通していなかったからである。

翌日の便を待つため、私は宿をさがして灯のともり出した町を歩いた。低いトタン屋根のつづく同じような家並には、青白い靄が沈み、製材機の音だけが絶えず遠くからひびいて聞こえて来

ていた。
たずねあてた宿は国境守備隊の兵営の近くにあった。それは朝鮮の田舎町のどこにも見掛ける、玄関だけの格式ばった、料亭を兼ねた日本旅館であった。私は電燈の暗い奥座敷に通された。膳を運んで来た部屋の女中に、竜岩浦の町の事を聞いた。女中は返事をせず、何故だか大口をあけてげらげらと笑いつづけた。金歯を見せて無作法に笑うだけの女を相手に、私は侘しいその夜の食事をとった。
翌朝、守備隊の営門の前の発着場からバスに乗った。ふるびたフォードのバスは町をはずれると高い堤防を一つ越えた。枯草の堤防の外に、雲の垂れた冬のままの平野が、はるかに黄海にむかってひろがっていた。その、ポプラの立ち枯れた野の窪ごとに、小さな部落が土に埋もれるように寄り合っていた。バスは雪のまだ残る、鴨緑江の支流をいくつか渡って西に走った。
昼近くなり、楊市と云う村でエンジンを冷すためしばらく停車した。赤い煉瓦の教会をかこむ一かたまりの藁屋根だけの部落に、日曜日なのか、着飾った農民の男女らが明るく行き交っていた。彼らと共に座席に乗りこんで来た巡査は、拳銃で物々しく武装していた。数年前まで「匪賊」の出没した国境地帯であると云う事を、私はしだいに実感として知った。「匪賊」らは共匪——金日成匪とも呼ばれていた。
楊市を過ぎて、平野はいつか土のくろずんだ沼沢地と変った。その地平に、鴨緑江が絶えず白

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い帯のように見えてつづいた。空は暗く、飛ぶ鳥も見えなかった。沼沢の中に、低い丘陵が島のように起伏して連らなった。

その丘陵の一つのかげに竜岩浦の町がかくれていた。町の彼方に鴨緑江は茫々とひろがり、一紆沖で黄海にそそいでいた。ニセアカシヤの並木の枯れた舗道だけが広い、忘れられた廃墟の都市のような町であった。

竜岩浦と云う、北鮮の辺境の漁港に最初に目を着けたのは、不凍港を求めて南下して来た帝政ロシヤであった。日露戦役の直前、彼らはこの町を突然に占拠し、市街と兵営とを築いた。当時は河口に臨んだ良い港だったのであろう。町を丁字に貫く、広い不似合な道路も、そのときにロシヤ人の技師たちが開いたものだと云う。

しかし戦争の後、竜岩浦は見るかげもなくさびれていった。しだいに流れ寄る川の泥が、港を一面の葦の洲に変えてしまったからであった。泥に残された狭い一筋の水路だけが、今はかろうじて町を漁村として生きながらえさせていた。このさいはての地に精錬所を築く事などを、一体たれが考え出したのであろう。

河岸まで続く白い道路の上に立って、私を出迎えてくれていたのは、先発した小室と云う老人の事務社員であった。彼と井上工事主任とだけが、一月前に来て新しい現場の段取りを始めていた。井上主任は行き違いに、連絡のため京城に赴いていた。

茶色の作業服をジャケツの上に不恰好に着込み、兎の毛の防寒帽を目深かに冠って、人なつこい笑顔で寄って来た小室老人は、まるで極地探険隊のようであった。バスを降りるといきなりきびしい寒気が頬を刺した。満洲から氷のとけた川の上を越えて吹きつけて来る風であった。町にはほとんど人の姿も見えなかった。

潮気にさらされ、軒の朽ち傾いた家々がまばらに道の両側に並んでいた。警察と対い合った一軒だけの二階家が、私たちの泊る、竜名館と云う名の旅館であった。精錬所の建つ敷地は町から四粁ばかり離れたところにあり、そこにはまだ飯場も現場事務所も建っていないと云う事を私は知らされた。

宿に荷をあずけたのち、私は新しい同僚と共に狭い街を歩いて見た。道路は宿から百米ほど先で行き止りになり、灌木のまばらな小さな岩山が河にむかって突き立っていた。そのふもとに何軒か残る煉瓦家はロシャ人が来て建てたものなのだろう。税関支所と郵便局とに今は用いられていた。かつての兵営は米穀倉庫となり、街裏の空地に、軒の瓦の崩れ落ちたままひそかに立ち並んでいた。

岩山のかげの小高い堤防を登ると船着場があり、溝川のような水路が、河口をはるかに覆う黒色の泥の洲の中を、深くえぐって一筋沖につづいていた。

小山のようなその泥の堆積にさえぎられて、鴨緑江の流れも、対岸の満洲の山々も見えなかっ

た。風の吹きすさぶ荒涼としたながめに、私たち二人はしばらく無口に佇んだ。
小室老人は私を夕食に招待してくれた。彼の借りた家は竜名館のすぐ裏にあった。霜柱がひどく、街の家はみな地震にあったように左右に傾いていた。凍上を防ぐため部屋の中に大きな石をいくつも重しに置くのが、この土地のしきたりだと彼は教えてくれた。
朝鮮のどこかで女給をしていたと云う妻と、貰い子らしい、表情のにぶい、頬の赤い小さな女の子だけが彼の家族であった。
「こんなところに来たのじゃあ、酒でも飲まなければたのしみはありませんよ」
と、彼は一升瓶をそのままコップについで私に渡した。漁港だと云うのに、骨ばかりの太刀魚以外にとれる魚もなく、冬は野菜も手に入らないところだと、小室夫人は愚痴を云いつづけた。眠った女の子をあぐらの中にかかえたまま、老人は他愛なく酔い始めた。
暗い畔をたどって私は竜名館に帰った。深夜の町は盤石のように星空の下に凍っていた。

大学を出て一年ほど私は京城の街で働いていた。現場技師として、麻浦と云う、市のはずれの朝鮮人部落の中に建つ被服工場の工事を一つ担当させられたのであった。三千坪ばかりの煉瓦造の建物であったが、私にとっては最初の仕事であった。

敷地の低い草むらの中に現場小舎を立て、出入りする大工や土工らを相手に、私は馴れない工事監督として毎日を暮した。はじめて手にする転鏡儀の操作に苦しみながら、言葉のわからない朝鮮人の労働者らにまじって、私ははげしい、自分で求めた孤独な生活をつづけた。朴と云う、無口なクリスチャンの少年の定夫だけが私の相手であった。

同じような日が過ぎた。労働者らは黙々と土を掘り、仕事を終えるとわずかな労銀を受けとっては細い路地の町を帰っていった。

私のことを「監督さん」と呼ぶ彼らの声にも、汗と大蒜の匂いにも、支払いの日に必らず起る親方らとの無知な諍いにも、しだいになじんでいった。

基礎工事が終ると土工らは去り、現場で働くものは百人近い煉瓦工たちに変った。単調な煉瓦積みが来る日も来る日も繰り返されるころ、きびしい、雲一つない真夏の日照りがつづいた。いつか彼らを叱咤する、自分の声に気付いて、息を呑むような思いにとらわれる事もあった。

作業場の空が昏れ切り、暗い油燈が朝鮮人部落にともり出すと、汗と埃に汚れた現場服のまま電車に乗って、私は京城の市街に帰った。私は赴任して一月ほど後に支店の屋根裏の合宿を引き上げ、街の山手の、基督教青年会のアパートの一室を借りて住んでいた。

それは鉄のベッドと机一つだけ備えつけられた、僧院のようにひそかな三階の部屋であった。鍵をかけると何の音も聞こえない夜の部屋を、訪れて来る友も居なかった。

私は机の上に、金剛山の歌会で写した一枚の少女の写真を飾った。銀色の額の中に、山草の束と図鑑とを抱えたセーラー服の少女は、私の撮影に驚いて明るく微笑んでいた。焼付けを間違えたため、その写真は右と左とが逆になっていた。

京城のアララギ会員たちが開いてくれる、月に一度の歌会だけが私のよろこびであった。その夜の集まりを唯一つの期待として、自分で求めて来た、異郷の街の孤独な毎日の生活を繰り返していたのだと云えよう。

歌会は清和女塾と云う、本町通りの町裏にある、小さな私立学校の作法室を借りていつも行なわれていた。私の期待にも関わらず、会はきまって寂しかった。世話役の大塚教授のほか、府庁の土木技師の安蘇濬、会社員の水川浩吉、結城哀草果の門人である藤富老夫妻、それに病身の宮田夫人、守永夫人らが代るがわる姿を見せるだけであった。私は自分の焦慮をぶちまけるように激しい批評をし、さらにつのる孤独な思いを抱いて一人のアパートに帰って行くのが常であった。

しかし、その歌会に、中村年子は必らず熱心に出席した。大塚教授に伴われて席につくと、ひとりだけ年稚ない少女である事を知っているように、私たちの雑談には交らず、会のあいだつつましく眼を伏せて、人々の批評のことばをていねいに手帳に書きとめていた。

そうして時々、何かのはずみに白いさわやかな笑顔をあげた。それは生きて行くことのみにくさを知らない、水のように清潔な表情であった。私は少女が会うたびに少しずつ大人びて行くの

に気付くように、その横顔をひそかに離れて見守っていた。少女はたれからも愛され、いたわられていた。

歌会のあと、連れ立って帰るときに、どのようなものを読めばよいかと問いかけられる事もあった。私を見上げる時、淡い、肩までの髪がかげろうのように匂った。

「ベーベルの婦人論を読んでごらんなさい」

と、あるときいくらか突き離すような言葉で答えた。そうしたあとに、悔いに似た気持にとらわれていった。そのような本の名を軽々と少女にむかって口にした私自身に対して抱く、自己嫌悪の感情だったのであろうか。

それだけであった。それだけの関わりに過ぎなかった。私は唇を嚙むようにして、少女への愛情に耐えていた。

秋が来て、徴兵検査を受けるために一週間ほど休暇を取って父の郷里に帰った。広島県の奥地の農村である。検査の結果は第二乙であった。補充兵の召集が来る事を覚悟しなければならなかった。私はその日から毎日、赤紙のとどく日、一人の兵として戦場に発つ日を待って生きなければならなかった。

その明日の私の運命をたれの負担としてもならない。私はひとりだけで生き、稚ない歌会の少女のいまだ知る筈はない、耐えて来たひそかな感情を絶ち切らなければならない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com